

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月19日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26285208

研究課題名（和文）インクルーシブ時代および高度医療時代における聴覚障害教育の在り方に関する研究

研究課題名（英文）Research on education for the hearing impaired, adapted to inclusive education in advanced medical age

研究代表者

原島 恒夫（Harashima, Tsuneo）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：70262219

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、海外先進諸国（独国、仏国、米国）におけるインクルーシブ教育に関する実地調査を行った。また国内では、医療機関側と教育機関側における「連携」に関する調査、通級指導教室（難聴・言語障害）と特別支援学校（聴覚障害）における連携についての調査、難聴学級経験者へのインタビュー調査、特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション方法に関する調査などを行った。その結果、海外におけるユニークな聴覚障害インクルーシブ教育実践および我が国における聴覚障害インクルーシブ教育の緒課題が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義としては、インクルーシブの概念が各国の実情および障害者の実態やニーズに合わせ、現実的かつ柔軟なユニークな実践が既になされていたということがあげられる。例えば、独国においては、聾学校に言語学習課題をもつ健聴者を逆統合していたこと、仏国においては、健聴児童にも覚えやすいキュードスピーチを活用して難聴児とのコミュニケーションを実現していたことなどである。社会的意義としては、我が国の現状において、医療機関側と教育機関側との意識のずれなどが課題としてあげられ、また、難聴児のニーズについても当事者の意識や考え方に配慮する必要性などが示唆された。

研究成果の概要（英文）： In this study, we conducted a field survey on inclusive education in advanced foreign countries (Germany, France, and the United States). We investigated “collaboration” between medical institutions and educational institutions in Japan, the current status of cooperation between regular classes (hearing loss and language impairment) and special needs classes (hearing impairment), and communication methods in schools for the deaf. The results clarify the practices specific to the hearing impaired in inclusive education abroad, as well as the problems associated with coordinating related organizations in Japan.

研究分野：聴覚障害教育

キーワード：聴覚障害 インクルーシブ教育 高度医療時代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

特別支援学校(聴覚障害)が遭遇している昨今の状況、すなわち医療技術の進歩(新生児聴覚スクリーニング、人工内耳)は、特別支援学校(聴覚障害)教育の今後の在り方に多大な影響を及ぼしていくものと推察される。また、子ども達をとりまく社会的状況も大きく変化しつつある。社会はインクルーシブ教育に向かって大きく舵を切り、また共生社会の実現、すなわち障害のあるなしに関わらず共に生活し学ぶ権利の実現は、特別支援教育にも大きな影響を及ぼしている。聴覚障害児の早期発見および早期人工内耳装用の効果が顕著であり、なおかつインクルーシブ教育や共生社会へのハードルが低くなりつつある現在、聴覚障害児をもつ親たちが、聴覚障害を有する子ども達の教育の場として、特別支援学校(聴覚障害)ではなく通常学校を希望するようになり、特別支援学校(聴覚障害)の存在意義や在り方は既に変容しつつある。

ところで海外の先進諸国における状況について、既に著者らは、独国や仏国における若干の情報を得ている。独国では既に人工内耳の普及率は高く、聾学校の児童・生徒数の減少が進んでいるが、健聴児であっても音声言語の聞き取りに課題のある聴覚情報処理障害児(APD児)を中心に言語発達やコミュニケーションに課題のある児童を取り込むという逆インテグレーション教育の実践が行われている。また、仏国においては、キュードスピーチ(主に子音などの音韻を手形で表すコミュニケーション手段)を聴覚障害児の在籍する通常学校において活用し、教師の音声や子ども同士の会話を理解できるように工夫している。

また、聴覚障害児のインクルーシブ教育が進む中で、特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーションやコミュニケーション指導に関し、近年様々な変化が生じている。かつての聴覚口話法教育(補助的なキューサインの使用を含む)一辺倒の時代は過ぎ、手話や指文字の活用が普及してきたことである。特別支援学校(聴覚障害)の専門性や独自性を明確にすることは、インクルーシブ時代において特別支援学校(聴覚障害)の存在意義を明確化することであるといえる。

以上の背景から、我が国の聴覚障害教育の在り方について検討する上で、医療技術やインクルーシブ教育の進んでいると思われる先進諸国の実態を調査するとともに、我が国における聴覚障害教育の現状を調査することは重要であると考えます。

2. 研究の目的

本研究では、前述した状況に関し、まず海外の先進諸国(独国や仏国、米国等)の現地調査を行う。また特別支援学校(聴覚障害)のコミュニケーション手段の現状について分析することで、特別支援学校(聴覚障害)のニーズや特異性を明らかにし、さらには、医療機関と聾学校との連携や、交流教育、特別支援学校(聴覚障害)と通級指導教室の連携についての調査を行い、今後の聴覚障害教育の在り方について考察を行う。

また、仏国のインクルーシブ教育に関する調査を行った上で我が国におけるキューサイン(キュードスピーチ)の可能性を探り、我が国のインクルーシブ教育への導入について考察を行う。

3. 研究の方法

(1) 海外先進諸国におけるインクルーシブ教育の現状に関する調査

独国(ミュンヘン)の現地調査

仏国(パリ)の現地調査

米国(セントルイス)の現地調査

(2) 国内の特別支援学校(聴覚障害)と医療機関との連携に関する調査

栃木県内事例におけるアンケート調査

(3) 通級指導教室のニーズおよび特別支援学校との連携に関する調査

通級指導教室のニーズに関する調査

特別支援学校(聴覚障害)幼稚園における交流保育の現状についての調査

通級指導教室(難聴・言語障害)と特別支援学校(聴覚障害)における調査

(4) 国内の特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーション手段およびキューサイン(キュードスピーチ)の現状に関する調査

国内の特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段に関する調査
聴覚障害児のコミュニケーション・ブレイクダウンに関する調査
キューサイン研究会の立ち上げおよび情報交換と討論

4. 研究成果

(1) 海外先進諸国におけるインクルーシブ教育の現状に関する調査

独国ミュンヘンの聴覚障害学校においては、聴覚情報処理に課題を持つ児童・生徒 (Auditory Processing Disorder; APD)等が聴覚障害者と共に学ぶユニークなインクルーシブ教育が実践されていた。聴覚障害児教育において活用されている指導方法が、聴覚情報処理に課題を持つ児童・生徒や言語学習やコミュニケーションに課題を持つ児童・生徒に対し同様の効果があり、特に教室内のS/N比を改善するためのマイクロホン&イヤホンシステムを有効活用していた。

仏国パリでは、パリ聾学校教師による通常学校に在籍する聴覚障害児教育のサポートが行われ、通常学校にインテグレートした聴覚障害児のためには、キョードスピーチ(音韻情報を指の形で表すサイン)が有効活用されていた。また、フランスではキョードスピーチ通訳者の養成が行われ、キョードスピーチ通訳が手話通訳とともに利用できる状況があり、通常学校に在籍する聴覚障害児も利用していた。

米国セントルイスにおける Central Institute for the Deaf(CID)では、乳幼児から小学校まで、人工内耳や補聴器を活用した聴覚口話法教育が徹底され、中学校からは通常の学校へのインクルーシブ教育に移行していた。

(2) 国内の特別支援学校（聴覚障害）と医療機関との連携に関する調査

栃木県内の事例においては、連携の状況も良好であるといえた。しかしながら、個々の施設での考え方や方向性の違いから関係性を構築できない場合もあるため、ケース検討会や連絡帳だけでなく、相互コミュニケーションの機会を増やし、いかに関係性を深め継続できるかが、より良い連携を築いていく上で、重要になると考えられた。今後は、連携先である医療機関との一致度など、双方での連携の考え方についても検討していく必要がある。

(3) 通級指導教室のニーズおよび特別支援学校との連携に関する調査

通級指導教室のニーズに関する調査

小学校時代に難聴通級指導教室に通級した経験のある20歳前後の聴覚障害者7名を対象に聞き取り調査を行った結果、聴覚障害当事者側からみた難聴通級指導教室に対するニーズは、以下の通りである。1)「難聴通級指導教室で行われる指導」に関しては、発音指導や正しい日本語を身に付けることを目的とした言語指導や、各教科の補充指導等、2)「難聴通級指導教室に求められる専門性」に関しては、指文字や手話の活用により、聴覚障害のある児童のコミュニケーション手段に合わせることで、通常学級の担任と連携を図ること、通常学級の教員や児童に対して聴覚障害の理解啓発活動、3)「安心できる場所としての難聴通級指導教室」に関しては、交流会などにより、同じ障害のある児童や大学生と関わる機会の提供であった。また、難聴通級指導教室担当教員とのコミュニケーションの重要性や安心できる場所としての難聴学級は、聴覚障害のある児童の心理的な面においても重要な役割がある。

特別支援学校（聴覚障害）幼稚部における交流保育の現状についての調査

質問紙調査を通して、特別支援学校（聴覚障害）幼稚部における交流保育の現状と課題について検討を行い、以下の点が明らかとなった。1)交流保育が教育課程に位置付いている学校が68.6%、位置付いていない学校が28.4%であった。また交流保育の主な目的として、生活経験を広げる、社会性を身につける、大きな集団の確保が挙げられた。2)交流先の幼稚園や保育園に事前に伝える情報と交流先から相談される内容は類似しており、聞こえの状況や補聴器・人工内耳の配慮点に関する回答が多くあった。3)交流保育の課題について、「人工内耳装用のため、難聴児の困り感に気づいてもらえない」「交流保育の実施回数の少なさ」等の課題も挙げられた。

通級指導教室（難聴・言語障害）と特別支援学校（聴覚障害）との連携についての調査

質問紙調査を通して、通級指導教室（難聴・言語障害）と特別支援学校（聴覚障害）との連携の状況について検討を行った。その結果、特別支援学校（聴覚障害）と連携を行っていない教室が41.6%「必要に応じて連携・協力を行っている」が32.5%であり、積極的に連携をしているとはいえない状況であることが明らかとなった。連携の困難さの理由としては「連携・協力が必要な状況ではない」や「地理的距離が遠い」という回答が多かった。しかし、特別支援学校（聴覚障害）に求められる連携・協力としては、「発音・発語指導」、「聞こえに配慮した環境づくり」、「聴覚活用の指導」、「障害理解・障害認識」が挙げられており、「聴覚障害教育に関する専門的知識や情報の入手に対する特別支援学校（聴覚障害）への期待が明らかとなった。

(4) 国内の特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーション手段およびキューサイン(キュードスピーチ)の現状に関する調査

国内の特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段に関する調査

教員による幼児期の聴覚障害児に対する聴覚口話および手指(手話、キューサイン、指文字、身振り)の使用の実態を明らかにすることを目的とし、全国の国公立特別支援学校(聴覚障害)幼稚部の教員を対象に質問紙調査を実施した。その結果、調査時点における大多数の教員は、聴覚障害児の年齢や聴覚活用の程度、指導場面の如何を問わず、聴覚口話を基盤として手指を用いていた。手指の中でも手話は8割以上の教員が用いており、幼稚部の主なコミュニケーションの手段として定着していると考えられた。指文字や身振りの呈示率は幼児の年齢に応じて変化することが明らかになった。また、聴覚口話(言語音声)と手指の呈示方法は、大多数は同時呈示であったが、一部の教員は継時的呈示も用いていた。

聴覚障害児のコミュニケーション・ブレイクダウン(CB)に関する調査

4歳と5歳の聴覚障害児を対象とし、CB場面における対象児の反応について、言語行動および非言語行動の観点から分析した結果、14回の反応が非言語行動によって行われるものであることが確認された。以上より、聴覚障害児のRSを分析する場合、言語行動のみでなく、非言語行動も分析する必要性が示された。また、非言語行動の分析の際には、文脈を踏まえた検討の必要性が考えられた。

国内でキューサインを活用している特別支援学校(聴覚障害)に呼びかけ、キューサイン研究会を2016年4月23日に立ち上げた。その後、年に3回(合計10回)の研究会および年1回の日本特殊教育学会における自主シンポジウムを開催し、情報交換を行った結果、聴覚障害児教育の日本語指導(音韻獲得)においてキューサインが有効であり、かつ健聴者とのコミュニケーション手段としても活用できる可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

井口 亜希子, 原島 恒夫, 田原 敬 : 聴覚障害児の言語獲得における指文字の役割に関する文献的考察, 指文字獲得課程と語彙獲得の側面から. 障害科学研究, 43;137-148, 2019 (査読有)

井戸 伸之, 左藤 敦子 : 通級指導教室(難聴・言語障害)と特別支援学校(聴覚障害)における連携および協力の現状と課題. 筑波大学特別支援教育研究, 12;73-81, 2018 (査読有)

原島 恒夫, 吉野 賢吾, 太田 康子 : 米国における聴覚口話法教育, 人工内耳とインクルーシブ教育の流れの中で. 聴覚障害, 73;54-59, 2018 (査読有)

井口 亜希子, 原島 恒夫, 田原 敬, 堅田 明義 : 特別支援学校(聴覚障害)幼稚部におけるコミュニケーション手段に関する研究, 手指の使用に関する質問紙調査を通して. コミュニケーション障害学, 35(2);64-72, 2018 (査読有)

鈴木 裕, 左藤 敦子 : 特別支援学校(聴覚障害)幼稚部における交流保育の現状と課題. 筑波大学特別支援教育研究, 11;17-24, 2017 (査読有)

原島 恒夫, 橋本 時浩, 松本 愛, 伊藤 詩織 : フランス国立パリ聾学校との交流および

パリのインクルーシブ教育の現状. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 39;171-178, 2017 (査読無)

新関 彩香, 井口 亜希子, 田原 敬, 原島 恒夫: 難聴通級指導教室に対する教育的二一
ズに関する研究, 通級経験のある聴覚障害者7名の語りの分析から. 聴覚言語障害,
45(2);91-99, 2016 (査読有)

原島 恒夫, 小淵 千絵, 大金 さや香, 芦谷 通子, 土井 直, 鈴木 祥隆: 高度医療時代お
よびインクルーシブ時代における聴覚障害教育, ドイツにおける取り組みから. 筑波大学
附属聴覚特別支援学校紀要, 38;146-150, 2016 (査読無)

李 彩環, 田原 敬, 原島 恒夫, 鈴木 祥隆, 堅田 明義: コミュニケーション中断場面
における聴覚障害児の訂正方略に関する検討, 従来の分析方法および非言語行動の分析を含
め. 障害科学研究, 40;223-232, 2016 (査読有)

小淵 千絵, 芦谷 通子, 原島 恒夫, 土井 直, 大金 さや香, 大島 美絵: ドイツ・バイエ
ルン州における聴覚情報処理障害 (APD) の評価、支援システムについて. 聴覚障害-冬号.
70;26-32, 2016 (査読無)

[学会発表](計14件)

井口 亜希子, 原島 恒夫, 田原 敬, 堅田 明義: 言語獲得期の聴覚障害児に対する手指の
使用に関する研究, 発達段階に応じた指文字の使用特徴. 日本特殊教育学会第56回大会,
2018,09/22-24.

脇中 起余子, 長南 浩人, 小宮山 邦枝, 中道 勝久, 松本 末男, 原島 恒夫: 聴覚障害教
育におけるキューサインの状況, 聾学校2校からの報告を中心に. 日本特殊教育学会第56回
大会, 2018,09/22-24.

大金 さや香, 小淵 千絵, 佐藤 友貴, 菅波 沙耶, 小出千沙子, 原島 恒夫: 重複障害児
の医療と教育の連携における現状と課題. 日本リハビリテーション連携科学学会第19回
大会, 2018,03/03-04.

脇中 起余子, 長南 浩人, 原島 恒夫, 板橋 安人, 松本 末男, 聴覚障害教育におけるキュー
サインの再評価 - 日本語学習支援に重きをおきながら -. 日本特殊教育学会第55回大会,
2017,09/16-18.

井口 亜希子, 原島 恒夫, 田原 敬, 堅田 明義, 特別支援学校(聴覚障害)幼稚部の指導場
面における手指の活用に関する研究 - 教員による聴覚口話を基盤とした手指の使用意図 -.
日本特殊教育学会第55回大会, 2017,09/16-18.

大金 さや香, 小淵 千絵, 佐藤 友貴, 原島 恒夫: インクルーシブ教育下における聴覚
障害児の医療と教育の連携について. 日本リハビリテーション連携科学学会第18回大会,
2017,03/18-19.

原島 恒夫, 小淵 千絵, 大金 さや香, 芦谷 道子, 原田 公人, 太田 富雄: 聴覚情報処
理障害 (auditory processing disorders; APD) へのアプローチ 11, ドイツ・バイエルン
州での APD 児支援に関する取り組みを中心に. 日本特殊教育学会第54回大会,
2016,9/17-19.

井口 亜希子, 原島 恒夫, 田原 敬, 堅田 明義: 特別支援学校(聴覚障害)幼稚部の指導
場面における手指の活用に関する研究, 教員による聴覚口話を基盤とした手指の呈示. 日
本特殊教育学会第54回大会, 2016,9/17-19.

李 彩環, 原島 恒夫, 鈴木 祥隆, 田原 敬, 堅田 明義: 聴覚障害児におけるコミュニ
ケーションの中断に関する検討, コミュニケーションの中断の修復プロセスに着目して. 日
本特殊教育学会第54回大会, 2016,9/17-19.

Harashima, T., Obuchi, C., Ogane, S.: Unique inclusive education in Singapore, France,
and Germany for persons with a hearing handicap. 12th Asia Pacific Congress on Deafness,
2016,7/7-10.

原島 恒夫, 小淵 千絵, 大金 さや香: インクルーシブ時代における特別支援学校(聴覚障

害) ; ホームページからみた連携. 日本リハビリテーション連携科学学会第 17 回大会, 2016,03/19-20.

小淵 千絵, 大金 さや香, 原島 恒夫; 聴覚障害児支援における医療機関と教育機関との連携に関する実態調査, 日本リハビリテーション連携科学学会第 17 回大会, 2016,03/19-20.

井口 亜希子, 原島 恒夫, 田原 敬: 特別支援学校(聴覚障害)幼稚部における手指等の活用に関する実態調査; 幼稚部教員の手話・指文字・キューサイン・身振り等のとらえ方について. 日本特殊教育学会第 53 回大会, 2015,9/19-21.

原島 恒夫, 小淵 千絵, 鈴木 祥隆, 松本 秀彦, 小林 優子, 堅田 明義, 前川 久男: 聴覚情報処理障害(auditory processing disorders ;APD)へのアプローチ10; 注意障害と聞き取り困難. 日本特殊教育学会第53回大会, 2015,09/19-21.

[図書](計1件)

小淵 千絵, 原島 恒夫, 小川 征利, 八田 徳高, 小林 優子, 大金 さや香, 田原 敬, 坂本 圭: きこえているのにわからないAPD[聴覚情報処理障害]の理解と支援. (小淵 千絵, 原島 恒夫 編), 学苑社, はじめに, PP.1-4, 1章, PP.10-21, 3章4, PP.66-72, (全150p) 2016.

6. 研究組織

(1)研究分担者

小淵 千絵 (Obuchi, Chie)

国際医療福祉大学・保健学部・准教授

研究者番号: 30348099

田中 慶太 (Tanaka, Keita)

東京電機大学・理工学部・准教授

研究者番号: 10366403

小林優子 (Kobayashi, Yuko)

上越教育大学・学校教育研究科・講師

研究者番号: 40594411

四日市 章 (Yokkaichi, Akira)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号: 20230823

鄭 仁豪 (Chung, Inho)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号: 80265529

加藤 靖佳 (Kato, Yasuyoshi)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号: 10233826

左藤 敦子 (Sato, Atsuko)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号: 90503699

宮本 信也 (Miyamoto, Shinya)

白百合女子大学・人間総合学部・教授

研究者番号: 60251005

大六 一志 (Dairoku, Hitoshi)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号: 10251323

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。